

源氏物語第一部における予言・王権・「女の物語」をめぐって

——大朝雄二・藤村潔両氏の批判に寄せて——

日向一雅

On Prophecy, Royal Authority and the "Tales of Women" in the First Part of the "Tales of Genji"-----

This article has been written in response to the comments made by Professors Kiyoshi Fujimura and Yuji Ohasa on the arguments expressed in my work "The Themes of Genji Monogatari." Their arguments extend over a wide range of issues but they differ from mine. So with the problem I am interested in, that is, the triple structure, prophecy, royal authority and the "Tales of women" as central, I have clarified the points on which we differ, and shown that their criticisms are not pertinent.

藤女子大学『国文学雑誌』の大朝雄二・藤村潔両氏の源氏物語についての連載の対論「鶯の嘴」において、三五号（昭和六〇年七月）から四〇号（昭和六三年三月）の六回にわたり拙著『源氏物語の主題』（桜楓社・昭和五八）、その他の拙稿⁽¹⁾の二、三の論点に対して批判の言及がなされている。元来「鶯の嘴」は藤村・大朝両氏間の源氏物語論や源氏物語観の差異や食い違いを対論として自由に論じているものなので、拙著がそこで繰り返し返し論議の対象とされたことは大変有り難いと思うだけで、両氏の議論に参加しようなどとは思わないが、両氏から批判された点ならびにそれに関連する問題について、返答の意味で一、二私見を述べておきたい。もっとも批判の範囲は拙論を越えているところもあるのだが、出来るだけ問題点を明確にするかたちで、私の答えるべき範囲で、また関連する問題の範囲で、以下個々に私見との異同や問題点を明らかにしてみたい。おおまかに整理して、拙論への批判および私の関心を持つ問題は予言の問題、王権論、三部構成説、「女の物語」といったところである。これらの問題の位置づけは私にとっても重要であるが、大朝氏藤村氏においてもそれぞれの源氏物語論に関わって重視されているのであり、その議論は上記の論点が渾然一体となったかたちで拙論への批判、さらに拙論の依拠する論文への批判ともなっている。はじめに大朝氏との対立点について触れる。

一 予言をめぐる

大朝氏と私との予言をめぐる対立は当初、拙著が予言の長編的契機について氏が過小評価しているのではない

かとしたところから発したと思う。氏が「源氏物語の長編的骨子として藤壺事件あるいは予言のみを指定するのは明らかに片手落ちと言わなければならない。」「第一部といえども心ずしも予言に支配される物語とは即断できず、源氏にかかわる日記的な時間の持続を創出したところに物語の長編構造の根幹があったと考えられる。」「事件に付随して予言が語られるのであって、決して予言に導かれて事件が展開するものではない。」「等々と言われた点について、それは予言の孕む構想上構造上の意義を軽視するものではないかと言及したのであった(上記拙著七〇―七一頁)。それについて大朝氏は、「拙考(大朝氏論文)が予言の有効性を全面否定しているかの如くに」日向が論じている点に「当惑する」と言われる(『国文学雑誌』三五号、四頁。以下誌名は省き、号と頁数だけを記す)のだが、そう言われると私も当惑する。拙稿で過小評価ではないかとはいったが、「全面否定している」わけではないし、「全面否定しているかの如くに」受け取られたとすれば、私の書き方の問題か氏の受け止めかたの問題か、あるいは双方が相乗したせいかといったところであるが、拙稿に「全面否定」の文言はない。三九号でも氏は、「日向説は、拙考(大朝氏論文)での第一部といえども予言に支配されている世界ではないとするものを、批判し否定する意図を含んで立論されているのであって」(四三頁)と繰り返し「否定」を強調するが、私見は第一部における予言の比重を重視するという立場からの批判であり、それ以上でも以下でもない。

おそらく大朝氏と私の予言についての捉え方の違いは、氏が物語の局面や文脈との関わりを重視して予言を捉えるのに対して、私見は予言が第一部の物語の全体に関わるものとして、その構想や構造の根幹に位置して長編化を導く意義を持ったところにあるかと思う。たとえば氏は、「桐壺巻の予言は若紫巻の夢解きと組み合わせられてはじめて、源氏物語の始発部の根本構想の全貌が明らかになると思われる点に、格別の注意を向けたいと思う。」(三七号、四〇頁)と言われる。予言の意味は「始発部の根本構想」に限定されるところに氏の立場はある。具体的にいえ

ば次のようになる。「三つの予言がそれぞれの物語局面に高度に意図的な配され方をしていることに注目したものである。桐壺巻の相人の予言はストリートに藤裏葉巻の準太上天皇に結びつくものではなく、その直後に語られる藤壺の登場との関係で読まれるべきであり、若紫巻の夢解きが藤壺の懐妊と組み合わせられて意味を持つことを論じたのが拙考であった。」(三五号、五頁)、「そのように(更衣を薫う帝と源氏がともに藤壺を愛するという構図を指す―日向注)緊密に結ばれている更衣の死から藤壺の出現に至る中間に位置する高麗人の予言のみを独立させて、藤裏葉巻の準太上天皇との関連でのみ読み解くのは偏狭ないしは飛躍にすぎるのであり、光源氏と藤壺との運命的な出会いの一環として読まれてしかるべきものである。」(三七号、四〇頁)と。氏においては桐壺巻の予言は藤壺登場のための意義が強調される反面で、藤裏葉巻の準太上天皇との呼応は極度に軽視されているというべきであろう。私見は桐壺巻の予言の意味は藤壺物語を分泌するとともに、「藤裏葉」の準太上天皇と密接に呼応するものとしてともに重視するというものである。

その理由は予言が源氏の確固とした帝王相を示しながら、帝王になるとすると乱憂が起こるといふ矛盾した内容であったところに本質的な謎としての意味があったと考えるからである。予言の内容が逆であったとすれば、つまり源氏は乱憂に遭うがその後では帝王になるといふようなものであれば、何ら問題はない。そうでないところに謎としての重要な意味が孕まれたのである。帝王の相は不動であり、臣下の相ではないというのだから、帝王になるほかにないはずであるが、帝王になるとすると乱憂をまぬがれないというのは、それがそのまま実現するとすれば、源氏は帝王になるが乱憂に遭って破滅するというような運命を考えなければならぬ。そうでなかったことは物語の示すところである。ということとは予言は何か大きな謎として設定されていたということである。乱憂が透視される帝王相という予言の真相とは何か、源氏は帝王になるのかならないのか、帝王相を持ちながら臣下になった源氏はどのようにして

帝王相を実現するのか、予言はそうした謎を孕んだものとして謎を解いてゆく物語の構想の根幹に位置したというのが、私見である（前掲拙著七〇頁）。そうした光源氏の予言の物語、王権の物語が藤壺を媒介にしていることはいうまでもないし、準太上天皇という特異な源氏の栄華も、私は氏が戯画的に断定して示してくれるほど他愛のないものとは考えていない。

二 第一部論をめぐって

私は三部構成説を金科玉条と思っているわけではないが、源氏物語の世界を全体として理解する上で比較的妥当な説であると思っている。それに対し大朝氏は源氏物語は正篇統篇として捉えるべきだとして、三部構成説は全面否定する。この問題は常に成立論構想論と絡んで議論が錯綜するのだが、私としては構造的・主題論的観点から捉えたいと思う。具体的には藤裏葉巻に第一部の大団円を認めるか否かということであり、予言と準太上天皇の呼応をどう評価するかという問題に関わる。私も光源氏の一代記としての物語は正篇として一括することに異論はないが、しかし、源氏の一代記の転換点として「藤裏葉」は物語の画期をなす独自の重要な意味を持っていると考えてよいと思うのである。その重要さは「須磨」「明石」や「薄雲」「少女」などが持っている転換点としての意味とはレベルが違う。長くなるが、大朝氏の「藤裏葉」大団円説批判の論拠の主要な点を適宜抜粋して、私見との違いを明らかにしたい。

- (1) いわゆる第一部が、準太上天皇という極限の栄華を語っているから大団円だという把握は、男の作者による既

成の物語の定型ではありえても、女が書いた源氏物語に直ちに適用できるものではない。光源氏の栄華の実現が第一部の主題であるとする把握は、政治主義的な男の側の価値観であって、女の作者による女の物語の主題と認定すべき根拠はどこにもないのである。(三五号、四頁)

(2) 第一部が藤裏葉巻で主題を完結させているか否かの認定は、五十四帖をトータルに視野に収めた上で、いわゆる第一部そのものの細密な検討を経て答が出されるべきであって、予言があるから古物語であり、だから古物語の伝統に従った大団円だと短絡すべきものではない。(三六号、一〇頁)

(3) しかして、その三人の子——帝と后と太政大臣——で築き上げられる光源氏の栄華を語るためにのみ第一部の物語がある、とは考え難いところに問題の所在がある。それは紫君による主題を無視することになるゆえに、私は養成できないのである。すなわち、若紫巻で紫君の発見と明石御方の噂がからみ合っているというのは、紫君が生涯子を産むことのない女性として描こうという作者の根本設計図の現れなのではないか、と私は考える。明石御方が后になって光源氏世界の栄華を分担する切り札の姫君を生む母親の役が与えられているのに対して、紫君は光源氏の妻としてのみありつつける物語構想が、そもそも紫の物語として根本にあったのではないのか、ということである。(三七号、四四頁)

(4) 私が藤裏葉巻をめだたしめだたしの大団円とする説に同じえないのは、そこでなぜ紫上の実の姫君が東宮妃にならなかったのかの一事に尽きる。言い換えれば、物語作者はなぜ紫上を「石女」として作り出したのかに私はこだわらなければならない。(四〇号、三二頁)

(5) 現在の第一部論は予言に支配された古物語的世界とし、めだたしめだたしで大団円になっていると解くのであるが、それは政治主義的な男性原理に基づく理解に引きずられたものではないか。理想男性が巨大な栄華を実現

するのは当然であり、源氏物語にあっても重要な「素材」であったのは疑えないが、「栄華」それ自体は決して「主題」ではない。物語の発端部においてすでに脱政治主義を明確に打ち出している以上、「予言」と「準太上天皇」だけを抜き出して、その栄華を「主題」とし「古物語」と判定するのは、源氏物語をあまりにも矮小化しすぎているといわざるをえない。私がいわゆる「王権論」に極めて懐疑的なのも、そのゆえである。全てを身分や家柄で割り切る政治主義的な男性原理の根幹が、王権ということになるだろう。さすれば「反王権論」こそが紫式部の根源的なモチーフであったといつて過言ではない、と私は考える。(四〇号、三五頁)

(6) 桐壺巻から若紫巻への展開を相人と夢解きで捉え、そこに第一部の長編構造を措定し、帯木三帖を異質な物語として切り捨てる物語理解は、第一部を藤壺事件の展開として栄華の実現でのみ捉える偏向を犯しているといわなければならないのである。藤壺宮の存在が軽いといっているのではない。それはまさしく「一部大事」なのであって、藤壺密通事件がなかったならば女三宮事件も語られることはなく、そうすれば薫も存在しないのであって、源氏物語の骨格は全て崩壊してしまうのは確かである。それにもかかわらず、源氏物語は藤壺事件を語るためだけの物語とは考えがたいのであって、永遠の理想女性を地上化した紫君が光源氏の「現実」として生涯の伴侶となることに、源氏物語発端部の最も重要なモチーフがあると私は考える。(四〇号、三六頁)

ここで繰り返し言われていることは第一部に光源氏の栄華を語るといふ主題は存在しないということである。そのような把握は政治主義的な男性原理の観点であり、女の作者による女の物語である源氏物語の主題とは認定できないというのである。これが氏の批判の第一の骨子である。もう一つはそれと表裏の関係で、第一部を源氏の栄華の物語とする捉え方は紫上の物語を無視するものであり、その点で賛成できないというものである。それはここでは明言さ

れていないが、紫上の物語にこそ源氏物語正篇の主題があるとするのである。だが、これは栄華の主題というものをあまりに単純化しすぎていないであろうか。まるで氏の源氏物語論のためには予言や六条院の栄華は書かれていない方がよいかのように思われる。予言は「光源氏と藤壺との出会いの一環として読まれる」べきだとして、「準太上天皇との関連でのみ読み解くのは偏狭ないしは飛躍」であり、予言と準太上天皇を結合して栄華の「主題」を判定することは源氏物語の「矮小化」であって、源氏の栄華は「素材」ではあっても「主題」ではないといつて非難する。だが、これは逆に氏が予言や準太上天皇の意味を矮小化し故意に単純に昔物語風のめでたしめでたしの結末と変わらぬものとして、戯画化していると思われぬ。

私が予言や準太上天皇や六条院の栄華を重視するのはそこに光源氏の存在形式の独自性が典型化されていると考えからである。すなわち臣下でありながら臣下を越えており、天皇の父でありながら臣下であるという光源氏の特異な存在形式を物語世界の現実にとり位置づけるかは決して自明な事柄ではなかったと思う。六条院世界が四方四季御殿から成る非地上的神話的構造を有すること、そこに源氏の潜在王権が具現していたであろうことは光源氏の不思議な帝王相の実現した姿であったと考えられる。準太上天皇という地位はそういう源氏の独自の存在形式のための絶妙な考案であり、光源氏の存在の本質に関わっていたのだと思う。撰閲家とか太政大臣とかいう臣下としての栄華ではなく、冷泉帝との秘密の父子関係による王権性を体現した源氏の特異な栄華の実現に予言の真意はあったと思われるのである。準太上天皇とはそうした源氏の現実にあざわしい地位であり名分であったのだと思う。そういうものとして準太上天皇という地位は桐壺巻の予言に首尾呼応する均衡のある形式であったということである。そのような構造を持った第一部の物語が単純な古物語的レベルにないことはいくらでもない。

大朝氏は「現在の第一部論は予言に支配された古物語的世界とし、めでたしめでたしで大団円になっていると解

く」というふうに第一部論を位置づけ、それは「全てを身分や家柄で割り切る政治主義的な男性原理」の王権論であり、紫式部の根源的なモチーフは「反王権論」であったといわれる。その意味は「私は三つの予言があるから第一部が古物語的だ」という通説に反対しているのであって（三五号、五頁）とか、「予言があるから、予言に支配されているから未熟な古物語だ」という説明に、私は強い疑念を持つ」（三七号、三八頁）とかといわれるように、第一部論はその世界を「未熟な古物語」と規定していると評価するのである。王権論批判も同じ理解に発しているのであろう。だが、物語が予言に導かれた構造を持つとか、王権論として説明できる構造を持つとかいうことと、「未熟な古物語」のレベルにあるか否かということとはまったく別の問題である。氏が第一部論に対して、「予言があるから古物語であり、だから（藤裏葉）は古物語の伝統に従った大団円だと短絡すべきものではあるまい。」と決めつけるのは、それこそ次元の違う問題を短絡しているのではなからうか。

個別的な問題に一、二触れたい。(1)で氏は第一部を栄華物語とする把握は、男の作者による既成の物語の型であっても、女が書いた源氏物語に適用できるものではないと断定する。女の作者は既成の物語の定型を襲わないという根拠はどこにあるのかと問いたい。源氏物語が男の作者が書いた（と考えられている）先行の物語を縦横に引用していることは改めていうまでもない。源氏の栄華の物語というものを過小に評価しているのではないかとということである。また「藤裏葉」の大団円説に反対する理由として、大朝氏はなぜ「藤裏葉」で「紫上の実の姫君が東宮妃にならなかつたか」、作者は「なぜ紫上を『石女』とし」たかという問題を提起し、大団円説は紫上の主題を無視するものだと言われる。そこから氏は全編に一貫する女の物語の主題を想定するのだが、しかし、そうした主題もすべて首尾一貫して同じ比重や密度で扱われたのではなかったと思う。大まかに言って「藤裏葉」までと「若菜上」以降との間に一線を画すことはそれほど不穏当だとは思われない。「藤裏葉」の紫上が明石姫君の養母として参内し、退出に際して

源氏の準太上天皇に見合うように、「御輦車などゆるされ給ひて、女御の御ありさまに異ならぬを」という待遇を受けたと語られたことは、「石女」としての女の物語の主題とは別に「藤裏葉」における大団円意識の処理がなされたものと考えて不都合はないと思う。

あるいはまた氏は、源氏物語は「日記的な連続する歳月を綿密に叙するもの」であるゆえに、光源氏の十代、二十代と描き分けてきた物語が三十代で完結するはずもなく、四十代の物語が後続するのは当然だといわれ、四十代とそれ以前の物語との間に「主題や方法の転換を認めるわけにはいかないのである」（三九号、五〇頁）として、「藤裏葉」第一部結末説に反対する。しかし、その一方で四十賀が光源氏の人生のターニングポイントであって、「それ以前と以後とで光源氏の人生が正と負の符号で折り返されるものになっていると捉えられる」（同上）ともいわれる。四十賀を境に源氏の人生が正と負の正反対になるというのに、そこに主題も方法も変化がないというようなことがあるのだろうか。源氏の人生の正から負への転換に伴って女の物語の主題的な意味も変化したと考えるべきではなからうか。

三 「女の物語」

大朝氏は第一部論批判、王権論批判とからめて「女の物語」論を展開するが、私はそこで氏のいわれる「脱政治的」、「反王権論」的な「女の物語」論には逆に疑問を覚える。源氏物語が「女の物語」の主題を持つことについては異論はないが、氏はそれを「脱政治的」、「反王権論」的なものとして隔離してゆき、物語における政治や制度の問題と関わる点をあえて切り捨てるような立論をする。「女の物語」というものをそんなに限定してよいのだろうかという点である。それは源氏物語の構造を単純化平板化するだけではないかと思う。

氏のいわれる「女の物語」とは「品」を否定し愛情を優先する価値観を原理とする物語の謂である。たとえば次のように言われる。「源氏物語の根本的な思想として」、「品」をも否定する女性原理が桐壺巻、帚木巻を支えて」おり、それが「弘徽殿女御・東宮・葵上といった体制に密着した強固な背景を持つ人物をことごとく否定して、その対極に桐壺更衣・光源氏・紫上を語り出してくる」ところに、源氏物語の『作り物語』としての本領がある（四〇号、三五頁）と。そこでいわれる「品」をも否定する女性原理」とは次のような意味である。「帚木」の雨夜の品定め、「本妻論の総論」における「今はただ品にもよらじ、……」という左馬頭の発言は「厳密に整序された身分社会である平安貴族社会」にあつてはきわめて「異様」で「過激」であり、「平安中期の現実の風俗を写すものではなく、極めて物語的なものといわなければならない。」「この本妻論は政治を第一に考える男性の側の議論ではなく、愛情を第一義とする女の側のもの」である。そのように夫婦の仲に「品」を否定する「過激な思想」が語られたのは桐壺巻で桐壺帝が弘徽殿女御をさし置いて更衣を溺愛する事例を、「殊更に普遍化したもの」であり、それはまた桐壺巻末で左大臣が東宮の希望を無視して源氏を婿に迎えるところと呼応する。それらは要するに「政治的秩序を優先させる男性社会に対して、愛情を優先させる女性の価値観に従って、物語の中にしかありえない人間関係を作り出したこと」だといっているのである（同上、三三―三四頁）。このような氏の源氏物語観の集約として先にも引いたような、「反王権論」こそが紫式部の根源的なモチーフであるとか、「女の作者による女の物語の主題」に光源氏の栄華の主題（氏はそれを一政治主義的な男の側の価値観」という）はないといった結論が出てくる。

だが、ここにはいくつかの疑問を感じる。一つは雨夜の品定めの本妻論の「品」の否定は本当に氏のいわれるような「異様」で「過激」な思想なのかということである。というよりそれは本当に「品」の否定といえるようなものなのかということである。「異様」で「過激」な「品」の否定というからには社会制度としての「品」を否定するよ

うな思想でなければなるまいが、品定め発言がそのような思想的レベルにあったとはとても思われない。実際どれほど「厳密に整序された身分社会」だからといって夫婦生活の隅ずみまでが身分制の論理で律しきれないわけはないのであり、品定めが本妻の条件として「品」よりも人柄を優先させたからといって、それが社会制度としての「品」を否定するものであるはずはないのである。その意味で「異様」で「過激」な「品」の否定の思想というのは誇張が過ぎるのではなからうか。理想の妻は得難いという品定め妻女論は「品」の否定というよりも、人柄を「品」に優越させる議論でこそあれ、「品」そのものを否定するわけではないと思う。それは格別「異様」でも「過激」でもなく、むしろ貴族社会においても常識の範囲に属したと考えておかしくはないと思う。第一そこでの妻女論にはそれぞれの当事者たちにとってまさに各自の「品」に見合う一定の通婚圏が前提されているのであり、その範囲内で「品」より人柄を優先するということであつたはずである。過激な「品」の否定をいうなら更級日記の竹芝伝説の方がはるかにふさわしい。

大朝氏は品定め「品」の否定は「愛情を優先させる女性の価値観」、「女性原理」であるとして、そのような価値観に従って語られる桐壺更衣・光源氏・紫上に源氏物語の「本領」があると評価するが、弘徽殿女御や葵上は「体制に密着した強固な背景を持つ人物」として「女性原理」によって否定されていると見做す。ということは彼女たちは「女の物語」からは排除されるのであろうか。彼女たちを体制に密着した存在という時、藤壺や臘月夜はどうなるのか、やはり体制に密着した人物として「女の物語」の主題は担いえないものとするのであろうか。その他六条御息所・秋好中宮・玉簫・朝顔等々程度の差はあれ、体制との密着を否定しえない多くの女性たちはどのように位置づけるのか、疑問に思う。

また愛情を優先させる物語が「女性の価値観」とだけいえるのであろうかという疑問もある。作者が男と考えられ

ている竹取物語以下の物語群、伊勢物語などの歌物語にも総じて愛情を優先する論理はあるのであり、それを「女性原理」というのであればその思想は源氏物語だけに固有なものではなく、いわば物語文学さらには文学全体の根本テーマといつてよいはずである。それは言い換えれば氏が、「社会に対する個人という命題は、文学にとつての永遠のモチーフなのである。」(三六号、一三頁)といわれるような問題であらうと思う。そこでこの「社会」対「個人」、「男性原理」対「女性原理」という二項対立において、物語が「個人」や「女性原理」の側に立脚するということは、「女性の価値観」というだけでは処理しきれない広がりを持っていると思われる。物語は個人の側に立ち個人の問題として思想するが、それは社会との関係構造を抜きにして考えられないと同時に、逆に物語は個人の視点から社会を相対化するものでもある。源氏物語を「女性原理」の物語として「脱政治的価値観で貫かれている」というふうに規定し、「男性原理」の観点を排除することは、源氏物語の世界を一面化し平板化するにすぎないように思われる。それは六条院の栄華や光源氏の政治的栄達を語る物語の固有の意味を無視することにはかならないからである。源氏物語は氏が切り捨てようとする「政治主義的な男性原理」と「女性原理」との敵しい攻めぎ合いの、いわば弁証法的世界として独自の達成を示したと考えるべきだし、その方が物語の事実在即していると私は思う。少なくとも第一部では光源氏の栄華を単なる付け足しと見做すのでない限り、「女性原理」だけが物語を支えているとはいえないはずである。

氏は桐壺帝が弘徽殿女御よりも更衣を愛したことについて、帝は「公を捨てて私を採るといふ非政治的な選択」をしたといわれ、また後宮という政治と愛情の葛藤する世界で、「帝を政治よりも好き嫌いの感情を優先させる一人の男として描いたのは、源氏物語の作者が女であったから可能であった」(三六号、一四頁)として、私的心情に忠実な帝の造型をきわめて高く評価する。それは「御簾の内側」の「女の耳と目で捉えられた女の世界観で貫かれ」た「女

の価値観による女の『世の中』が描かれているのである」（同上、一七頁）というふうに捉えられる。しかし、桐壺帝と更衣の物語が帝の「非政治的な選択」とか「政治よりも好き嫌いの感情を優先させる」といった帝の個人的な心情、即ち「御簾の内側」の論理だけによって構成されているのでないことは明らかである。桐壺帝の更衣熱愛は愛情の問題であると同時に弘徽殿一派とは手を組まないという明確な政治的選択であったし、更衣には父大納言の遺言という家の問題が課せられていた。光源氏の物語はそうした親たちの抱えていた問題を組み込んでスタートするはずなのである。源氏物語の始発はそうしたさまざまな論理の錯綜する複雑な構造を持っていたと思う。ところが、大朝氏は「源氏物語は開巻第一声として、あまたの女御更衣の中で一人の女性を一人の男として溺愛する帝を語り出していく。後宮という最も政治的な場で、政治よりも愛情を選ぶ帝を描くというのは、蜻蛉の作者が願望しつづけていた男女関係の実現にはかならないといえるのではないか。」（同上、一六一—一七頁）といわれる。だが、それはあまりに蜻蛉日記に引きよせすぎて桐壺巻の複雑な構造を蜻蛉日記のレベルに一面化することになるのではなからうか。

氏はまた「虚構の核としての藤壺」を論じて次のように言われる。「物語における藤壺の役割は、自らの分身として地上に冷泉帝と紫君を送り出すことにあつたのである。（中略）物語の本体は藤壺の二人の分身で構築されるものなのである。そこで重要なことは、藤壺所生の皇子が光源氏の公的世界を分担し、紫君が私的世界となることにより、紫君が一切の政治性や社会性と切り離された純粹に個人として描かれてくる点である。」（四〇号、三三頁）と。藤壺の二人の分身がそれぞれ光源氏の公的世界と私的世界とを分担するといわれながら、なぜ氏は源氏物語の「女性の価値観」「脱政治的価値観」「反王権論」ばかりを強調するのか理解に苦しむ。特に第一部世界においては藤壺をはじめ主要な女性たちはほとんどが源氏の社会的政治的世界に重要な関わりを持っていたのであり、そうした点を捨象して紫上を特立し、女の物語の主題を立てることは物語世界の複雑な構造を単純化しすぎるのではなからうか。

四 藤村潔氏の批判に寄せて

藤村氏の拙著・拙稿への批判は前掲『国文学雑誌』三六号（昭和六一年二月）ならびに『藤女子大学・藤女子短期大学紀要』二五号（昭和六三年一月）所載の「源氏物語の主題」に要点は尽くされているように思われる。そこでこの批判の中心は王権論、ならびに「家」の遺志の実現を第一の物語の主題とみなす点に向けられていると思われる。はじめに王権論の批判から見てゆくが、ただ藤村氏の批判の方法は個別的なある一点を捉えて、その矛盾や欠陥への批判を突破口にその論の全体の枠組みを否認するという体であるので、議論の連続きとしては両者を区別する必要があると思うし、文体が曲折して把握しにくい面があり、誤解がないとも限らないが、拙稿に関わる範囲で見解の異同を明らかにするようにしたい。

まず私見の王権論への批判は拙稿が依拠した深沢三千男氏の潜在王権説が成立しないとするとどこにある。その根拠は深沢説が「光源氏の物語を王権の人知れぬ恢復」の物語として、「（源氏の）王権の神聖性への犯しは、犯しによってのみ恢復されねばならなかった」とする点への批判である。即ち深沢説では桐壺帝が光源氏を臣下としたことを源氏の王権の神聖性への犯しと見、源氏が藤壺との密通による皇子冷泉帝の即位によって王権の神聖性を回復したと見るのだが、その点を藤村氏は次のように批判する。桐壺帝が源氏を臣下としたことは神聖な王権への犯しとはいえず、桐壺帝は冷泉さえ生まれていなければ、退位の時、源氏を立坊させていたはずであり、源氏を王権から遠ざけたのは藤壺との密通であったとする。そこから氏は「源氏物語は帝王相に恵まれた皇子が皇位にはつかなかった物語となり、深沢氏の潜在王権説は見直しが必要となる。」（上記「源氏物語の主題」二五頁）とか、「源氏物語は潜在王権の物

語ではなく、帝王相に恵まれた不出世の皇子がさまざまな葛藤を経て、遂に王位につかなかった物語と読むべきではないのか。」(同上、三二頁)といわれて、潜在王権説の全否定に至るのだが、そのための根拠は具体的には上記の一点だけである。私も桐壺帝が源氏を臣下としたことは犯しであったとは考えないので、その点では藤村氏と同意見であるが、しかし、それだけで潜在王権説が全面的に覆るとは考えない。氏は「深沢論文における王権の聖性の原理なるものは、この桐壺帝の措置(源氏を臣下としたこと——日向注)を王権に対する犯しと認定するところに成り立っているものであった。(日向は)肝心なその点を否定しながら一方で潜在王権そのものを認めるところには論理の矛盾である。」(同上、三〇頁)といわれるが、私は光源氏における王権の聖性と桐壺帝がそれを犯したか否かは別問題だと考えるし、源氏が王位に就かなかったことと源氏の存在形式の王権的構造とは、これまた別の問題であると思う。即ち、光源氏の王権性とは予言の「帝王の上なき位にのぼるべき相」として源氏という存在に内在していた当為とでもいうべきものであって、桐壺帝の措置の如何によって証されるような性格のものではなかったと考えるのであり、王位に就かなかった物語だから潜在王権の物語でもないということはいえないと思うのである。臣下でありながら冷泉帝の実父であるという光源氏の存在形式がきわめて特異なものであることはいうまでもないが、そうした非日常的な存在形式のうちに源氏の王権性は現実化されていたはずなのである。六条院がそれを体現した空間であった。それが後宮的性格を持つとか、四方四季御殿という龍宮的な神話的構造を持つとか、宮中の年中行事を取り込んでいるとか、さまざまにその特性は指摘されてきた。それらを総じて源氏の潜在王権の構造として押さえることは格別不当な理解であるとは思われない。そうした源氏の現実が藤壺との密通に端を発していたことからすれば、藤村氏の立言とは反対に源氏を王権へと押し上げていく根幹に藤壺がいたといわなければならない。

次の批判を見よう。私が第一部に「家」の遺志の物語、名門再興の物語を見たのは、源氏の母更衣の家と明石入道

の家とが出自を同じくするところから、更衣・入道を介して源氏にも明石君にもともに現在の没落に瀕した家門を回復すべき課題が「家」の遺志として負わされていたと考えたからであった。同時にそこには先祖は子孫を加護するとともに、子孫の繁栄によって鎮魂されるといふ論理があると考えた。またその延長線上にどうか、それと並行するように源氏物語に繰り返される「怨みと鎮魂」の論理を物語の方法の原則として位置づけてみた。これらの点に関して藤村氏は、「家」の遺志の物語といったものは特に読みとれないといい、また源氏の栄華が六条院で語られる点に触れて、鎮魂の論理には矛盾があると強く批判される。

たとえば明石君の物語について、それは家の再興ということよりも、受領の娘が中宮を生むという、一条朝では既がありえなくなっていた関係の方により重点が置かれていたといい、また明石物語の発端となる霊夢は、勸修寺伝説の宮道弥益の幸運に相当し、入道はその幸運に賭けたというだけで、大臣家再興の悲願というようなものは感じられず、むしろ霊夢に賭けて、逆に自ら増殖せしめた没落の屈辱に堪えている姿があるだけだといわれる(三六号、八一九頁)。読み方の相違ということかもしれないが、私としては「家」の遺志の物語というものを光源氏と明石君が担った物語の構造として確認したつもりである。入道の心情の如何、即ち大臣家再興の悲願があるかないか、没落の屈辱があるにすぎないのか否かという問題ではないのである。

六条院が源氏の繁栄や更衣・夕顔の鎮魂のための場たりうるのかという点について、藤村氏の批判する点は次の二つである。

- (1) 源氏のきわめる栄華が横死した母更衣の鎮魂となつていて、その栄華は二条院でこそ物語られるべきではなかったか。

(2) 源氏は夕顔を二条院に迎えたいと思った。とすれば頓死した夕顔の鎮魂のために遣児玉鬘を世話するとすれば、それも六条院ではなく、二条院もしくは二条院の東院に迎えるべきであろう。(三三六号、七頁。前掲「源氏物語の主題」三三―三四頁)

いわれるとおり、拙稿の鎮魂の論理に従って彼らの最も望ましい鎮魂の場所がどこかとなれば、二条院であるといつてよいと思う。しかし、源氏の栄華が六条院において語られたから鎮魂の論理は崩れるかといえは、そういうわけではないと思う。おそらく当初源氏の栄華は二条院と東院とにおいて構想されたと考えられるが、そこで実現できる邸宅は場所が都心部であるだけに二町を越えることは不可能であったと思われる。ところが、四町に四季を配する邸宅こそ源氏の王権性を体现する空間としてふさわしいと着想した時、六条院の成立に至ったのであろう。高橋和夫氏の指摘された構想の変更である。つまり源氏の栄華の空間としては六条院の方が二条院・東院構想より完璧でありえたからである。そうした六条院での栄華は母更衣の鎮魂にならないということはない。六条院が源氏の弥増す栄華の空間であった以上、子孫の繁栄を見届ける更衣の霊は慰鎮されたと考えてよいからである。

問題は六条院が六条御息所の故地であったことに関わって、玉鬘を六条院に迎えたことが夕顔の鎮魂のために適切であったのかどうかということである。藤村氏は、拙稿が夕顔をとり殺したのは六条御息所の生霊と見なしながら、なぜ御息所の霊の休らう六条院に玉鬘を迎えるのかという点を疑問とする。しかし、そこでも玉鬘は御息所の邸そのものに迎えられたのではなかったという点を重視したい。そもそも六条院は「六条京極のわたり」に、中宮の御旧き宮のほとりを、四町を占めて造らせたまふ。「(少女)」「未申の町は、中宮の御旧宮なれば」(同上)というように、未申の町だけが六条御息所の旧邸であり、他は御息所とは関係なかった。玉鬘はその六条院の丑寅の花散里の町に迎え

られたのであって、御息所の邸とは対角線に接する、いわば六条院の中では一番離れた場所であったのであり、特別に問題はなかったのだと思う。

最後に「主題」の問題に触れる。私見は上に見たような第一部の物語における王権譚の構造ならびに「家」の遺志の物語の構造を、光源氏を中心にして見た時の第一部の物語を特色づける最も基本的な構造として、第一部の主題と見なした。そして光源氏の王権の成就の物語に抱撰されるようにして「家」の遺志の物語があると考えたのである。

それに対して、第二部は第一部とは主題・構想・方法・文体にわたって新たな質的發展があり、物語としての飛躍があるとして、宿業の主題ならびに六条院の解体と女の人生の問題をもう一つの主題として立てたのであった。⁽²⁾ そうした主題の立てかたについて、藤村氏は「主題は原則として一つ」とする竹内敏雄編『美学事典』増補版・『美学総論』に依拠しつつ、源氏物語の主題は物語の全体、少なくとも正篇を貫くものでなくてはならないとして、拙稿がそういう規定に当てはまらないことをいわれ、特に王権の主題というものを退けて、正篇の主題は貴種流離譚であり、桐壺巻に正篇の物語の主題があるとする主題論を展開された(前掲「源氏物語の主題」三四―七〇頁)。即ち藤壺は白鳥処女説話として、明石君は「海面下の世界を背景にもつものとして」、それぞれ貴種流離譚であり、光源氏は臣籍降下したが貴種流離であり、それらを合わせて正篇は貴種流離譚として統合されているとされた(同上、五五頁)。だが、それではそれぞれの流離譚の担う主題的な意味を切り捨てることにならないであろうか。それぞれの貴種流離譚が担い、またそれらの交錯する構造的な意味として、王権の主題や「家」の物語の主題を第一部においては積極的に想定しうるのではないかと私は考えたのである。むしろ拙稿が主題論として不十分なことは承知しており、特に上記のような捉え方では紫上や夕顔の物語の第一部における位置づけがうまくできないと思っている。今それをもう一つの流離譚である継子譚として位置づけ、そこに女の物語の主題というべきものを考えるべきかと思ったりする。また拙著

に「主題」を名乗ったとはいえ、そこでは主題論そのものを対象にしたわけではなく、物語の構造の検討をとおしてその主題的な意味を考えてみたのであって、主題論の課題は今後に残っていると思っっている。しかし、一方で藤村氏のように光源氏の王権譚の主題を貴種流離譚に一般化し、「帝位につくべき源氏が、帝位にはつかなかった物語」（同上、六七頁）とする点にはやはり同意しがたいように思う。光源氏の存在形式の非日常的王権的構造を読み切れなくなるのではないかと思うからである。

さらに第一部と第二部との関連について一言補足すれば、拙稿は一部から二部への主題の変換は一部の王権譚を宿世観の論理によって反転した世界として二部を捉えようとしたものであり、二部世界の主題は一部のそれとまったく別個に設定されたというふうに捉えているわけではない。そしてその際も光源氏を中心にした捉え方になっていることは確かである。主題あるいは主題的なものをどのレベルで、どのように見定めたらよいのか、私には理論的な裏付けは特にない。だが主題は一つといわれると、そうかも知れないと思う反面、源氏物語のような複雑な作品の場合には必ずしもそう断定できないのではないかと思ったりする。そうした曖昧さを承知しながらあえて「主題」について言及したのは、そうすることで作品の特質や達成をどのように捉えられるのか考えてみたからである。拙稿はそうした意味での主題考であった。

注

- (1) 批判の対象となった拙稿は拙著『源氏物語の主題―「家」の遺志と宿世の物語の構造』の「一 先祖と靈験」「二 怨みと鎮魂」「三 光源氏論への一視点―「家」の遺志と王権と―」「四 六条院世界の成立について―光源氏の王権性をめぐって」のうち、主として二・三・四章、特に三章。その他「予言とは何か」「解釈と鑑賞」昭和十五年五月、「光源氏の王権をめぐって」（『日本文学』一九八四年五月）、「源氏物語の達成 主題と構想」（秋山虔編『王朝文学史』東京大学出版会）。

一九八四年である。
(2) (1)の「源氏物語の達成 主題と構想」。